

シンガポール

外国人採用で求められる日本企業のあり方は？

NUS教員や学生が提言

【シンガポール時事】日本企業のグローバル化に向けた人材開発や採用活動に関するサポート業務などを行うコンサルタント会社エナジャイズ（東京都新宿区）は18日、シンガポールで東南アジア地域の人材採用に関する企業向けセミナーを開催した。同セミナーでは日本の職場環境などに関する研究を行うシンガポール国立大（NUS）の教員による講演のほか、NUSの学生らによる日本企業への就職に関するディスカッションが行われた。

◇採用目的の伝達、社内共有を

NUS人文社会科学部日本研究学科のヘンドリック・マイヤーオーレ准教授は「日本企業が外国人を雇用する場合には、相手に採用目的をしっかりと伝え、現場を含む社内全体で共有することが重要だ」と強調。さらに「指導者は外国人社員に対し、業務内容を明確に説明するだけでなく、その業務を指定された方法で行わなければならない理由も明らかにする必要がある」と指摘した。

同准教授はその他にも、敬語の使い方など、社内・社外でのコミュニケーションで重要なことも、外国人社員にとっては難しいことが多く、はっきりと説明する必要があるほか、外国人社員の相談相手を長期間にわたって確保することも重要だと語った。また日本で働く外国人社員には、会社以外でもさまざまな活動に参加することを促し、会社が日本での生活のすべてとならないよう配慮することも必要だと述べた。

◇給与よりキャリアパス重視

セミナーではさらに、NUSの理系・文系の学生3人によるディスカッションも行われた。学生らは「就職先を検討する際には、インターンシップやその会社で実際に働いている人から直接話を聞くなどし、情報を集めることが多いが、日本で実施される日本企業のインターンシップは他国の企業と比較すると非常に短期間なため、その企業について知るには不十分だ」と指摘した。

また「新卒入社の際には給料よりも、その企業で得られる経験やキャリアパスを重視する」「就職先の企業で明確なキャリアパスが描けない場合には転職を検討する」との意見も聞かれた。

◇多くの日本企業、就職フェアで有名大新卒を採用

製造やIT関連など、さまざまな分野の日本企業が参加した同セミナーでは、エナジャイズの尾崎太朗代表取締役社長から、同社が大阪大学大学院と提携して2013年からシンガポールで毎年開催している、ASEAN地域の学生対象の日本企業就職フェア「ASEAN・キャリアフェア・ウィズ・ジャパン」についても紹介された。これまでにシンガポールで計5回開催された同就職フェアを通して、多くの日本企業がNUSや南洋理工大（NTU）、シンガポール経営大（SMU）をはじめとするASEAN地域の有名大学の学生の新卒採用を行ったという。同就職フェアは今年は2月に開催され、同地域からの参加学生数は600人以上に上った。

エナジャイズは東南アジア地域の事業展開の拠点として、12年にシンガポールで現地法人「アジアパシフィック・エナジャイズ」を設立。今年前半には南アジア、中東地域の事業展開の拠点として、スリランカでも新たに現地法人を開設する予定だという。



日本企業への就職について話すNUSの学生ら=18日、シンガポール

中国建設銀行、シンガポールに新オフィス=インフラ融資とプライベートバンキング

中国建設銀行（CCB）は18日、シンガポールにインフラ融資サービスとプライベートバンキングの両オフィスをオープンさせた。両部門でシンガポールが持つ強みを生かし、同国でのプレゼンスを高める。19日付のシンガポール紙ストレーツ・タイムズ（C3面）が伝えた。